



幼君輔佐之心得

口 9
3339



口9
3839



幼君輔佐之心得

去五味均平蔵

一 貴妃と後しおも知愚賢不肖の

まかちおまへ生活まじむとからぬ

半、橋人此面の出とく殺す百人の

むらたむれくふふまふとちりておんし

かへつあつるまといと人の性れさと

善なることゝ又水精の白く鏡の物を

下し刀此女のものをたけおとく火の



一 塵け水のう海深をがあとく仁義禮
智れ清く明なれこととあり大知
いふ今れ福な一是人の歎小といふ
心天地ふちらひ万物れ靈なるこ
たふいあれなるにあれいふ
とてことなむこころ明なること
あふあふいふ(聖人れ法代
校をよけよと上天子諸侯のたふ

よる下^ま庶人の穢れ起るのいふ
教をうけよといふと後世に
さる(道かまのふて人の教あま
知る人まもあつたといふた
福れと起るたが生活きよめ
ないあつと世のなるとも起る
おとひ人の信ふものもあつと
信ふあつとくして君れ善心出

一 おもひも我もて喜ぶ事やかく唯
公を以て勤世間の尚ぐる里は事なり
た一のりして君に名聞利祿の心を
いさむの心すする目あるもの心
流くかり世の事と三綱六常之道を
教る事もなきをたれとんか
いあつらひ君のあやまらざる君の悪
を長せむはふあはるは家世治る

日老くかく礼を日わくかる大信
た久君をくもむ誠ありとも婦
人女子は忠といふは是れ大信は職哉
先の知者の笑をま福を忠と云へり
が事半満といふは下れ事なりいま
世の事を見るに君の職をたけん
さあまこと海も船ありて北もか
神なんどふせぐ人いあるの教のたも

か多事とありなむいもや幼君の
いのなりにも教のなむいもや大臣又
傳とある人其の知通りありしは
不文不徳の君の善ひか後尔歳長
徳也亦祿所ありかして大臣家老
のむきくもあむいもや幼君の
祿也其志のむいもや幼君の
恥れも屋のほりむいもや幼君の

とやまかむいもや幼君の
ありとむいもや幼君の
罪といふ處むいもや幼君の
相にありむいもや幼君の
堀溝も落んとむいもや幼君の
警者の相あり又君のあやまあり
むいもや幼君の
宰相の力にありむいもや幼君の

君の悪くおちいぬ誰かあやまらざや
されたいか一伊尹周公の幼君を
相らぬまはらばれ厚たさる吉に
ふことまこと知るべし玉に大信幼君の傳
かのくねさるを入るべしなり

一 爲人君止於仁とあせむたといの
た高文学子女能あること人のよとして
に心くなくなきけさくあたる民の文

母と高年あつて涙志の如き君の仁を
喜ぶと本とあつしむらし孟子齊れ
宣王の一年に穀餽とあつ志のひさる
を新し程子宋の柳宗元とけなむ時
手あつて蟻に氷をよけし事と
獲たまけらあつぬるは君の仁
心を喜ぶといふ一を仁と喜ぶの
本は君の孝弟を仁とたまらるふあり

父母にむいましく兄弟を志し先
祖の厚徳を常不忘む高き所に
礼を以て教すむへし終終追慕を
父母兄弟喪と先祖祭とを尊ぶ
法も教奉る人君の身は法と
とかん論終ふと世の人君
父祖を慕ふと世を我々の身は
いかに大官大禄なき人

法も教奉る人君の身は法と
たのしむるあり飲食衣服金銀器用
の玩心を法とし先祖の廟不祠堂
をんどの事なきもあはれ君を
かくのまじき君いざりて親族
又、藩代の家臣志多ありむや
高きといふ人も分かれ農工商の
一はむらむの富ありあはれ世の

たろあまの人常尔玉家長久と祿り
とて世に奉と喜ぶ事と志と
かま人君あんど玉家繁栄乃玉
あもや唯とありに鬼神とこの里
僧徒巫祝と信と門と武運長久
息災延命の符あんと事禍とまけ
むもあまのたろのありあり幼君よ
孝身慈をふと下と知らむらるる

教るを女とま——

一 幼君をなぞるか——出た生質とらとも
学問の力をたれ我のたは世玉家此政
いふと師とせしと橋河の里わん
凡人亦学をた玉匠の曲となく舟子の
舵をたれおしといゆる学問とて必も
書とよむのこふかまら後古人の道を
たれ祿一分と自覺と立止しと理を明る

一と身にも法もあらず世の人た
書きよむの事おもひて感にたはるる
海に欲をなすれはかゝる事とせよ
人れうらと死の業多しなれ茶を腹
して病を海に飲食をとりて脾胃を
傷るがよし茶と食の人の身も害す
なまことあしく用れど人の身も害す
祿く学ぶともいふぬ学ぶの害ある處に

ありとられたる事となすはむと
とく学ぶと心おとあしくしる
学ぶと心おとあしくしる
学ぶと心おとあしくしる
学ぶと心おとあしくしる
の道といふなり世の詩文博雜は俗
俗に基双た推ひるむと
一藝者といふと
たは陸象山王陽明の心学を外道

程子朱子とせしめて自家に新説を
こたふ者少くは皆其の害甚しき
ありて人君も亦これに書小
學子進思録の如く常不講を
其の解六經の書又ハ和漢の史傳
をよみくつかる者も異端の
書其外雜書と見せしむるは
たゞ其の正しき徳義ある師と
あらず

いふ世の中も教千巻の書とて道
を知らざる人多し常一七功ありといふ
也

一 幼君はた常不善起人れなく交るを
才ハ教と次た之書を讀外も教件
の善ありとを教ハ其巧れ小人れ
其と出君の欲を起らば其をすむる
事ありとす十日の功と一日も元べらば

君は善心と事不致わらんやおは地幼君は
表尔后存よく賢士丈夫の如きくいに
文軌時わら異に君存の婦人女子亦
近く時を自持たると是尔座
程子此言尔是入り世の中在人君異端
私淑の南とひ源く又所儀情弱尔
て危くうのちおひ大抵奥方に成長
乳母老波のなとく近法くが成なり志言

とて一向尔異とまなれ母公姉妹とを
ぎの家の存なり世等おと起人倫れ夫
かたど毎日母公の古言を伺ひ孝行の
道源の教を志か一筆おひも表尔
をやく出へ表とまひは法縁に表尔
おだちぬる君大抵ぬ君となるべうは
いふ一人君尔師傳保れ官わり師の
常に教傳君の徳義とたはけ所跡

あしはる好むる小とあり先保の君の保
善いしあ飲食起居の半を法とせり
此三の官わきて五保あやまらむ
いんや幼君の此職片時と歎へり
才徳を人ともよひ師の職も保保傳
の二をかれと勤せむ一唯進者の
士とよくあはれ一君を法の子教人
物智深しと道程とよひとよまらむ

人わきまを君によかれ好むるを
害法の尔王家の民尔れとよべり
正直に欲をくなく君を法といひ
学知る人とも一と次たは大臣師
傳保の人心を法とせし小人あり
君の欲をまらぬも其の志るなり
た大臣心かけしと進傳は信と力
をあらむ君をたえり一人の

功をとりて威をうすきたれんはあり
あまの人源へ心を用べしなまの心法に
ふとい及かす事へし

一人君下の誅をいふを賢君といふ又
明君と云ふなりたといふを賢利發聰
明君なりと云ふ一己の知を是と云ふは
下の誅を用ず世の世志の理をさかざる
は王家滅亡はる世外ふわらば今世の中

一人君を見ふ事、知ありんか、
見ゆる人一己の知を頼家老長臣の威
とうだじお、世を政事王家に長臣に
回して迫侍二人己が欲をたせしむる
のこそかり大長臣威目くふたより家法
月に礼重たゆ誅をさしむる人もなく
ちりぬる是人君にびらう威をたかまじり
せんし七か、里人君威をたせしむる

老くあふありをれも中庸の九經チウリウケイ尔敬ニキヤウ
大信則不眩ダイシンニキヤウとい、孟子尔不得罪ニキヤウ於巨
室シツとわねと幼君の時にいふとあはむべし
家ケは長長と幼君はあふとい忠義
の心を励セツまじこころいふと幼君の
則ニキヤウとならぬ一
一 凡オホキねははよきとて一とて大抵歳長
ふんのものもたふすとい及キがしたる理と

初ハジメにきこむ一生シヤウは知チとならぬとの古人も
先入センニユとて歳長とて先マ尔ニをたじとせり
幼子コシとて歳長とて禁キンをたじとて神カミ神カミ戯キヤク言ゲン
をたじと好色コウシキ淫イン知チとてちびとて狂キヤウの又は
吝キン高カウ尔ニとて金銀財宝キンギンサイホウは利リ心シン又マタ血氣ケツキの
勇ユウをたじ人とてあはむの人はあなむは
たふあり幼子とてあはむは心シンあはむは歳サイの
長チヤウをたじといはむは二たふの要ヤウ事ジ也ヤ

一 養生せしむるにたゞ小兒れたるをみおぼる
半世の歳をかりてゆるすべし一 小
小兒れ破魔を射人形をたぬ拍を
也一 春風を紙鶴をあらるもた成
人の後かたむく屋む半たぬ後害
あつとまじやうをみどり教
ふ法をたて小兒れ心とてあゝ氣をいんら
しめ病を生まるもまゝ又謀りしむ

一 養一 兒半れおぼるを
傳とたぬ人あつと

一 養生に方飲食を節し一 氣血流通
をたぬとて一 三夜胡より半を法とあ終日
たこりなく夜に寝ふとたとおふて寝る
はるる勃へ一 半をよく法とむきたん
氣を付滞せし筋力を日々に血氣を
めり重ん病生ぜざるなり凡人たはる

わびむ病むとふくしむる戦はる人
病む見あく泰平は時人病むと今
富貴なる人十尔七八までの氣解弱く
田夫野人の氣解法中一流小中城
生むに戸福むむまめさるも同く
人は幼少より胡の法に記き書を讀
む習ふと法と先世のいふ海軍馬を
龍背古より一武藝を知らる馬の大將の

身一とまへて其の外法秘術のたがひの
こいよ海あむと龍背古の藝一と世の
人君武藝を家業とおぼしめし
ありきとたはな末をあらむと
學子同に治玉平天下は事おぼしめし人君身
一の家業とまへて一藝の事一小学
の教をまへて各おぼしめしを讀
書し一海武藝を龍背古のたがひ

血氣未清さるる勇氣を養ふ一端と
なまぬ一世人君法をむるはなほ
朝のむせく起夜の酒宴拵無のため
ふふり又の志剛利欲好色の為あはれ
邪を生し心身をくるめ脾胃腎虚脱
たぬぬあいた海もたぬあはれ是なるに
くく志おたゆの事なり世の人あはれ
ふけるを養ふ生し一羊を法をむるはなほ

生し一讀書まれば心法より病者
なり命をちあはれと思ふ愚癡なり
ちり幼君とたまの海は山意なり
しきまふ魚

一 保養之道、病生むるあるは病起りて
業を月とて来目保養ある人の業功も
かむる魚あるものなり幼君と病の
早く養育とまれば病因とすまふ

尔一葉法しやくはつぽうもくあむむんが祿ろくにおく療
治ちよほとよまへしやくはつぽう一はを癒いて病びやうをなすはよく
を機きとさしむべし一人の庸醫よういも満まんず
癒いうは今世こんせいの中なかと見みるにたろなる人
良醫りやういとあむぬぬとらうらう陰陽いんやう師し祈禱きと
者がの言ごんを信しん一神しんを法ぽう符ふなをたまひ
とたた一又醫いとあむぬぬも病功びやうこうの能のうむむ也
ここ一或は目めとあむむ一方角いっぺいかくとあむ

らぬ茶ちやと用よう病びやう満まんくくれとたたる也なりあ
かなむむべき半はんなりきん幼君ちゆうきん病びやうあむむ
積せき半はん法ぽうと先せんとゆるめ讀書とくしやう、子こを徳とく藝ぎ
等と丸まると志しははくくら先せん者しやも保たもまひ先
一病びやうここ目めといいだだ又また鞠きうせせむむ癒い
之こ一且かつの病びやうもたたららたた是こををらら一向いこうも
勤きんを廢はいままたた一い方ほう日じつの功こう益えきととなるべし
たたとともも海かい上じやうももをを癒いるるががばばとと一い種しゆ風ふう

わらむれを法あぐべー風やまど又船を
出の軍一皮風刺船としかく舟越
法あぐべきや是をの泊あふいまま
乙とまど人己が没義れ為益抜心力切
そ一病出とてはとやむべの理あ
海^{まき}法^{あり}師^{もの}因^{あり}物^{あり}師^{あり}ぬいとく金れおと起
益^{あり}取^{あり}心^{あり}ま^{あり}と法^{あり}月^{あり}あ^{あり}の^{あり}病^{あり}わ^{あり}あ^{あり}ま^{あり}
半とあ^{あり}る^{あり}べ^{あり}る^{あり}と^{あり}出^{あり}れ^{あり}己^{あり}が^{あり}家^{あり}業^{あり}と^{あり}な^{あり}ら^{あり}ば

一旦地あまると地^{あり}の^{あり}業^{あり}と^{あり}廢^{あり}出^{あり}る^{あり}半^{あり}か
病^{あり}亦^{あり}わ^{あり}せ^{あり}れ^{あり}半^{あり}と^{あり}廢^{あり}出^{あり}る^{あり}知^{あり}あ^{あり}ら^{あり}ば
人の^{あり}半^{あり}なり^{あり}幼^{あり}君^{あり}と^{あり}な^{あり}ま^{あり}く^{あり}數^{あり}人^{あり}や^{あり}の^{あり}心^{あり}
此^{あり}を^{あり}知^{あり}ぬ^{あり}一^{あり}

一 幼君を孝ひふべし讀書は子おるがむじふ武
藝^{あり}等^{あり}い^{あり}る^{あり}ま^{あり}ん^{あり}教^{あり}格^{あり}と^{あり}な^{あり}目^{あり}と^{あり}ま^{あり}い^{あり}あ
時^{あり}を^{あり}定^{あり}て^{あり}勤^{あり}き^{あり}む^{あり}ぬ^{あり}一^{あり}幼^{あり}君^{あり}の^{あり}一^{あり}人^{あり}哉
せめてい^{あり}ま^{あり}ら^{あり}か^{あり}ら^{あり}た^{あり}ま^{あり}の^{あり}あり^{あり}追^{あり}侍^{あり}れ^{あり}人^{あり}老^{あり}

・ 善い事なすむるに法をむねにおのづか
しむるに格法をわきまきりて
てま心知を聞きしむるに師傳入
對しむるに心を生じて尚忠とむるに
かゝるに人の心におのづかきりて
ぬ半のむねをのちり幼君の義理に感
ずるにふと常に教志をまげりたるに
人れ慕ふをわきまきりてむるに

むねがくはむねをわきまきりて
人の終日終夜思ふとむるに
法をのちりて理をわきまきりて
の法をわきまきりて世の中をむるに
人の代に里に時身持てむるに
あまむねを月とむるにむねを
なくむるにむるにむるにむるに
むるにむるにむるにむるに

お教人いひまかくを賢い道と云ふに
異端いたん覇者たしやの南なんの出入でいりぬやうかとわらふに
ふせぐべし世の中まよひし力ある君もあま
どな知れけざれどあまのいふ事ことは福ふくあひ
又は親族しんぞくのうきかんと清き氣よ、まよひ
を佛ぶつにまかすに南なんといふ又富を官禄くわんろくのたま
出しれむ世の毀き譽よ褒ほう貶てんふらふに覇者たしやの
功こう利りふたつ馬うま半はん教きやうふ卷まきの書しよとよとこと

一
な知れぬ者ものをなあり人同ひとどうに室むろを
志しくよのな、いふ位ゐたの或人あるひとを
幼君おとぎみを、歳長としなが婚姻こんいんのむまじわらひの
おと縁家ゆかりに風俗ふうぞくよ、いふ世よの女子むすめの徳とくも
おとが、た婦人ふじんを教人きやうじんとあむむ、いふま
世よの中なかを、いふに、名聞なもん利欲りよくとたよと
大官たいくわん大祿たいろく又、權門けんもんの家いへ筋すぢをとよ、あ後の
うきうきとなり家いへれおと、いふ事ことを、いふ風ふうを、いふ

後悔を執半村とてや初尔謀るべきなり
お中物婦をどのとて婿の家よりや小身
の女とめと為べと古人の教なりおも世友
福をきく人の女は夫れ家尔ゆき流しこの
お大源一又大老に友福をたて人の女は
流しとあるがう一よ世の中を身るよ大抵
奥より流し流しとて家風乱る事多し
男はよく女はを志の流し後世に後悔

あ執人のむまあまう好色はまうりなり
して婦人家の政を乱るためしお中
いふく聖人、まあ源記半村の幼君の
時とる人君尔此をせやくと志はべし
大信と此半の源日、おんをの流し
一君を正し教れと思ふ大信、まびと正し
く流し、いふし、十の流しとて大信、校尔入
四十九とて流し、いふし、己が知れ、いふし

徳とたゞはつてのち君にはふるまふといふ
されむ孟子も大人能正君心之非といふ
大人との徳を教人といふなりありしあり
字をなくすと忠義れん深む人の事を君
の爲る心を法はし知ある人よいふ一の
道をたゞ稱してまづこが身な法はしむ
處しんま世の中を身する君切む大臣
なむたの對心を生し酒宴推樂ふ心を

法はしあるの利を財宝と爲む人の
處法を略をうけむいさへんむ政をなし
臣家たうとま福に家風目く承れし
法ぬる法のほろが教ふをわが法はし
の家老長は先君れ忠を忘れ不忠
不義いんせんたる孝初君輔佐は
わむやたと又酒宴推樂の怠りなく
法はしんま書をよむ法武術の能ある

かかりまはしむとばと君を画かんうはく
己よとせしむと君を正すおとせしむと
諺ことわざも申敷可憐一心南はくふ麻子の
要なむがぶと

人君輔佐の心得ととる里是尔深
愈うと深を一あるを尔とゆれ
大抵此をさすと申すと大なる差ちがひを
へうとせしむとれととめつととる

かゝらく終わぬは里な〜輔佐の
人いじまてとながく此をさしむと
半あられ久則有徴とらといとふた
言あり急尔效と見事半なる後

元文丙辰十二月 福永心義識

525

50

